

は、と目を開けたとき、目の前には花畑が広がっていた。

一瞬、息を呑む。

「——もど、って、きた……？」

列車から降りた記憶がない。だが不思議なことばかりが続く世界だ。目的地に着いたから、役目はここまですと、列車は二人を放り出してしまったのかもしれない。

「……でも、ここ……？」

ここは私たちの世界じゃない。冬弥とこはねの想いでできた、今しがたまでのセカイの始まりの場所ではあるけど、目指していたセカイ……四人のセカイではない。

こはねは不安になって冬弥を見上げた。冬弥はこはねの視線を受けて口を開いた。

「とにかく、歩いてみるか」

「そうだね」

柔らかな地面を踏みしめる。二人なら大丈夫。そうやってきた。

だから、今回だって……

こはねは足を止める。歩けど歩けど、なにも見つからない。今まではなにかがあったのに。無意識に息を上げながら周りを見回す。美しい花畑が、今では不気味に思えた。

「小豆沢」

「青柳くん、どうしよう、なにも……」

「ああ」

冬弥も辺りを見回す。しかし、表情に焦りはない。

落ち着いて、どこかぼんやりと、虚ろな表情をしていた。

「青柳くん……？」

「小豆沢」

冬弥は微笑んだ。

「いいんじゃないか」

「へ？」

「ずっと、ここにいても」

「青柳くん……？」

「戻らないで、ずっとこのまま」

「青柳くん、どうしたの……？」

冬弥は答えない。白銅色の瞳を、こはねはじつと見つめ返した。

冬弥は戸惑っていた。

広がり続ける花畑。なにもない、ただそれだけの場所。恋人と二人立ち尽くしている。

先に立ち止まったのはこはねの方だった。そして、振り返った冬弥に、こう言った。

「いいんじゃないかな」

「え？」

「ずっと、ここにいても」

「小豆沢？」

「戻らないで、ずっと、このまま……」

「小豆沢……？」

こはねは答えない。冬弥は無意識に息を詰めた。

「寂しいよ」

冬弥は——トウヤは、こちらをじつと見つめるこはねから視線を逸らして俯いて、そう呟いた。

「え……」

「帰って、しまったら」

「……、」

「僕はどうすればいいの」

「僕……？」

耳慣れない一人称に、こはねは思わず聞き返す。

「いけないで」

幼い声が、行き場を失って、さまよう。

「おいていけないで」

いつの間にか、こはねの前には、ひとりの少年がうずくまっていた。

「ひとりにしないで」

まろいツートンカラーの頭。大きな白銅色の瞳。文字通り、小さく細い背中が、頼りなく震えていた。

「ごめんなさい」

こはねは——コハネは、消え入りそうな声で呟いた。
「でも……、怖い。視線も、ライトも、音楽も。音が……止まって。歌えなくなるの」

「小豆沢」

「怖い。逃げたい。ここなら……ずっと……」

「……っ、」

「助けて」

いつの間にか、冬弥の前には、亜麻色の長い髪をした少女がうずくまっていた。

——ああ。

悟る。

ここは二人のセカイ。想いを巡って拾い集めて、信賴しあって、……最後の最後にこぼれたもの。

こころの、一番、やわらかい場所。

「青柳くん」

こはねはトウヤに近づいて、しゃがみ込んだ。

「置いていけないよ」

トウヤは顔を上げた。

「ひとりにしない」

大きな瞳がぱちりとまたたく。

「……。……。ほんとう……。？」

「うん。——一緒に行かない？ 私と」

差し出された手を、トウヤは驚いたように見つめた。

「……。いっしょに？ いったいいの……。？」

「うん。もちろん」

地面に膝をついて、こはねはトウヤを抱きしめる。

「青柳くん」

よく頑張ったね。

腕の中で小さな身体が震える。

どんな姿でも、冬弥は冬弥だ。どんな姿でも、……

たとえそれが、冬弥の弱さを表した姿であっても。

こはねは受け入れる。

弱さも、全てひっくるめて、青柳冬弥が好きだから。

冬弥は、おずおずと一步を踏み出し、コハネの前に膝をついた。

「俺は、小豆沢を、とても強いと思っていた」

初めてのステージ。あのときの彼女にとって、どれだけ大きな一歩だっただろう。

それを地面に打ち捨てられ、踏みにじられて。

だが彼女は再びステージに立った。

眩しかった。かっこいいと思った。自分にはないきらめきだと思った。

「俺は小豆沢のそんなところが好きだし、その強さに何度も救われてきた。だが——……」

俺は、その想いを、返せていただろうか。

ストリートに飛び込んだばかりの彼女に、アドバイスや手助けをしなかったわけではない。だが、そのころを、自分が彼女にそうしてもらったように、すぐえたことはあっただろうか。

「小豆沢」

「小豆沢」

冬弥は腕を伸ばして、コハネを抱きしめた。

「ありがとう。……今まで、甘えていたな。本当に、ありがとう。俺たちのために、たくさん、頑張ってくれて」

小さく、嗚咽が聞こえた。

不器用な泣き方だと思った。息苦しいだろうに、俯いたまま、できるだけ声を殺して。

……そうさせたのは自分たちだろうか。

細く、頼りない身体を、優しく強く抱きしめて。冬弥は俯いた。長い亜麻色の毛先が頬を撫でていく。

気づくと、腕の中の温もりは消えていた。

立ち上がって、歩き出す。だんだん早足になって、最後には駆け出した。

早く。早く。

もう迷わない。

互いの強さも弱さも全て知ったから。

「小豆沢！」

「青柳くん！」

走ってきた勢いを殺しきれず、ぶつかるように抱きしめあって、二人は互いを見た。

「……会えてよかった」

「……うん……」

互いに言わずとも分かっていた。離れている間、なにを見たのか。なにを聞いたのか。なにをしていたのか。

こはねは顔を上げる。白い光が、花畑の隅の方から、少しずつセカイを覆っていく。

「……終わるのかな」

「……続くのかもしれない」

不思議と怖くはなかった。愛しいひとに寄り添って、

愛しいひとの熱を感じながら、目を閉じる。

どこであっても、君となら。

ずっと、ずっと、そうしてきたのだから。

「ん……」

目を開ける。

落書きだらけの壁。RAD WEEKENDのフレイヤー。どこからか聞こえてくる音楽。

こはねと冬弥は、いつの間にかストリートのセカイの路地で、寄り添って眠り込んでいたようだった。

「あ、青柳くん」

あわてて傍らの彼を揺り起こす。冬弥はん、と声を上げて目を開き、視線だけで周囲を見回した。

「……戻ってきたのか」

「そうみたい……」

寝起きの、ぼーっとする感覚。夢でも見ていたのだ

ろうか。しかし、ふと見下ろした先、手に持っていた帽子には数枚の花びらがあった。

「あ、」

思わず漏らした声に、冬弥がこはねの手元を覗き込む。

「残っているな。数枚だが……」

「うん。……夢じゃなかったんだね」

「ああ」

「あのセカイ、もう行けないのかな」

「……どうだろうな。セカイは、想いでできる場所だから。もしかしたら、この先、ずっと……」

「ずっと？」

「……小豆沢と共にいられるなら。それを、幸せといえるのなら、行けるかもしれない」

「……！ うん」

こはねは微笑んだ。

「そうだね」

未来は分からない。だけど、二人なら。何度もそう
確かめてきたのだから。

あの花畑から始まる二人のセカイは、どれだけの時
間が経っても、あり続けるだろう。